

中高生による絵本の読み聞かせ

工藤 裕子

柳田邦男先生、こんにちは。私は、中学と高校の教員をしています。そこで、希望する生徒といっしょに、放課後、学校の近くの幼稚園に絵本の読み聞かせに行っています。毎回念入りに絵本を選び、練習をしてから行きますが、一回目に行ったときの帰り道は、反省の嵐でした。「ページをめくるのが速すぎた」「お話の中になじみのない言葉があったから、説明すればよかった」「もっと盛り上げられた」……こんな言葉を聞きながら、私は、生徒たちがただ絵本を読むだけでなく、相手の反応を気にしながら読み聞かせていることに感心し、

また、うれしく思いました。二回目に行くと、幼稚園のみんなが生徒たちのことを覚えていてくれて、「お姉さん、知ってるよ」「また来てくれる？」という声を聞くことができました。こうなると、生徒たちもリラックスして読み聞かせをすることができまし、次の回の絵本選びにもがぜん力が入ります。回を重ねるごとに、楽しくなるそんな好循環を続けながら、ここ一年やってきています。大人の私も、この活動を通して気づいたことがたくさんあります。

まず、読み聞かせは誰がやっても同じではないということ。誰がやっても同じというならば、朗読テープでもいいということになってしまいます。一人で読むのとは違い、読み聞かせでは、子どもは人を通して絵本と出会います。読む人の解釈に

よって、読み方は違うものになりますし、読む人

ときく人の関係によっても、絵本との出会いは違う体験になります。そこには、ほかとはかえがきかないコミュニケーションが生まれると思います。

最初は、実は幼稚園に中高生がお邪魔するのは、忙しい幼稚園の先生方に迷惑ではないかと心配していました。読み聞かせのスキルなら、いくら練習しても幼稚園の先生にはかなわないだろうし、こちらは良い経験ができて、先生方に得るものはないのではないかと思っていました。しかし、緊張しながらも一所懸命に、子どもたちに楽しんでもらおうと絵本を読む生徒たちと、くいいるよくに絵本のページをみつめる子どもたちを見ると、これもまた、ほかとはかえがきかないコミュニケーションになっていと思うようになります。

した。

そして、子どもたちは、経験していないことでも、お話から学ぶ力を持っているということでもあります。ある日、「おじいちゃんのごくらくごくらく」という絵本が候補にありました。タイトルの通り、おじいちゃんが亡くなってしまふ話で、「こういう悲しい話より、もっと明るく楽しい絵本を持って行ったほうがいいのではないか」「死ぬ、ということが、難しくてわからないかもしれない」などの意見が出ましたが、彼らは熟考の末、持つていくことに決めました。生徒が読んでいる間、いつもは「次はこうなるよ！」などとコメントをはさむ子どもも、それは静かに聞いており、最後には拍手が起きました。小さい子にはわからない、と決めつけなくてよかったと思います。考えてみれ

ば、人は未知のことを本から多く学びます。忘れて
いるけれど、字も読めない小さいころからそう
だったはずです。まだわからないから、と遠ざけ
ていては、何も得られません。幼稚園から学校ま
での帰り道は、いつも感想や反省を述べあいなが
ら帰るのですが、その日はそれまでとは違った満
足がありました。

最初は、やってみたい、誰かの役に立ちたい、
という気持ちだけで始めたこの活動が、予想外の
気づきを与えてくれています。生徒たちにも、私
にも、そしてきつと幼稚園の子どもたちにも、い
ろいろなものを与えてくれるこの活動を、これか
らも続けたいと思っています。